まえがき

本報告書は，2020 年度後期に近畿大学総合社会学部社会・マスメディア系専攻の専門科目「社会調査実習 B」（担当教員：辻　竜平）において実施したウェブ調査「新型コロナウイルスの社会的影響にかかわる調査」の報告書である．

2019 年 12 月に中国湖北省武漢市において発生したと言われる新型コロナウイルス（COVID-19）は，日本を含めた世界各国・各地に拡散し，2020 年はそのパンデミックで全世界的に大きな影響が生じた．その影響は，公衆衛生はもちろん，経済・政治・社会・文化など社会のあらゆる領域に及ぶものであった．

本調査は，2020 年 11 月初旬，第 3 波の流行がちょうど始まりかけたころ，インターネット調査会社であるマクロミル社の調査モニターを対象として実施された．そのため，対象者たちは，2020 年 4 月から 5 月にかけての「緊急事態宣言」や，その後の「Go To トラベル」キャンペーンなどを経験し，それらにかかわる意見を持っていた．本調査では，そのような経験や意見を尋ねる質問が多い．一方，第 3 波はちょうど始まった頃だったので，それにかかわる経験や意見については扱っていない．

ところで，「社会調査実習 B」は，社会調査士課程に含まれる科目であり，全ての統計系の科目と調査系の科目を最終的に統合し，実際に自らの手で調査を実施し分析する実習科目（区分としては G 科目）として位置づけられている．その配当年次は 3 年となっており，また本専攻においては，この科目の先修科目として，中級レベルの統計系科目である「量的解析法」（社会調査士 E 科目）もしくは「質的分析法」（社会調査士 F 科目）のいずれかの単位を修得していなければならない．「量的解析法」と「質的分析法」には先修科目はないものの，これらは初級レベルの統計系科目である「社会統計学 A」（社会調査士 C 科目），「社会統計学 B」（社会調査士 D 科目）の内容の上に立つ科目である．また，これらの統計系の科目とは別に「社会調査法 A」（社会調査士 A 科目）と「社会調査法 B」（社会調査士 B 科目）という調査系の科目も設けられている．そして先述したように，「社会調査実習 B」は，これらの全ての科目の総仕上げの科目として位置づけられる科目である．

この報告書は，調査に参加した学生たちの調査レポートをもとにしている．学生たちは各自の興味関心の近さから 3 つの班に分かれ，調査計画から調査レポートの執筆まで行った．その参加者を班ごとに五十音順に記しておく．各班の人数には，もともとあまり差はなかったが，最終レポートの提出まで到達できた人のみを記しているので，人数に違いが出ている．

第 1 班：［オリジナル版では氏名記載，一般向け公開版（レポジトリ用含む）では氏名割愛］
第 2 班：［オリジナル版では氏名記載，一般向け公開版（レポジトリ用含む）では氏名割愛］
第 3 班：［オリジナル版では氏名記載，一般向け公開版（レポジトリ用含む）では氏名割愛］

報告書をまとめるに当たっては，学生たちから提出された調査レポートをもとに，辻が推敲し，不必要な部分やテーマの本筋からそれた部分を削除するとともに，不足部分は補った．

また，分析自体の誤りがないかどうかについても，一通りの確認を行った．それゆえ，辻が本報告書の内容について最終的な責任を負う．なお，統計分析には，Microsoft Excel のマクロとして動作する統計ツールである「HAD ver. 16 build 302」を共通のツールとして用いた．また，辻は別途 STATA ver. 16.1 も併用して，データの前処理等の操作や検算などを行った．

本報告書の各章の内容について，概略を記しておく．

第 1 章「『新型コロナウイルスの社会的影響にかかわる調査』の目的と概要」では，本調査の背後にある問題関心について述べたあと，調査の概要を記す．

第 2 章「新型コロナウイルスの影響による余暇活動の変化」（第 1 班）では，緊急事態宣言を契機とした「自粛」ムードの中で，人々がどのような余暇活動を行ったのか，どの余暇活動は増え，どれは減ったか，また，それらに当てる費用の変化はどうかについて検討している．

第 3 章「新型コロナウイルスの流行にかかわる情報伝達」（第 2 班）では，新型コロナウイルスにかんする情報収集行動と地域性，周囲の人々の新型コロナウイルス感染にかかわる情報伝達と地域性，COCOA など人々の接触を確認するアプリの利用ついて検討している．

第 4 章「新型コロナウイルスに対する恐怖」（第 3 班）では，地域における感染の多寡と感染への恐怖，通勤・通学の頻度と感染への恐怖，従事する職業と感染への恐怖，メディアへの接触と感染への恐怖について検討している．

最後に，本報告書は，調査会社のモニターを使ったこともあり，サンプリングのバイアスは否めないが，ある程度の一般性はあるだろう．本報告書の結果が，何某かの実践的課題の解の手がかりになるならば望外の幸せである．

2021 年 3 月

近畿大学　総合社会学部　社会・マスメディア系専攻
教授　辻　竜平